

クローズアップ+

本学教員の研究と、研究室を
それぞれ紹介します。

子どもたちの 「こころ」を探る

特別支援教育研究センター 富井 奈葉実 専任講師

「あなたは誰ですか？」

「あなたは誰ですか?」。こんな問いを投げかけられたら、皆さんはどんなことを答えるでしょうか。「私は〇〇です」という回答形式で、少し考えてみてください。

さて、皆さんはどんな回答を考えたでしょうか。これは「20答法」という心理テストの一種で、正確には「Who am I?」、「私は誰?」と自分自身に問いかけ、20個の回答を考えてもらうもので、自分のことをどのように理解しているか(自己理解)をみるために用いられるものです。ここでは皆さんの回答を聞くことはできませんが…。「私はトミイナナミです」と名前を答えた人、「私は高校生です」と所属を答えた人、「私はラーメンが好きです」と好きなものを答えた人、などなど。様々な回答があると想像します。



発達検査の様子

では、次にこの質問を小学生に聞いたら子どもたちはどんなふうに答えると思いますか?こちら是非、考えてみてください。またそれは皆さんが自身について回答したことと同じような回答になるのでしょうか。もしくは異なる回答がでてくるのでしょうか。

いかがでしょうか。少し難しい質問だったかもしれません。おそらく皆さんは「人それぞれだしなあ…」と悩んだのではないのでしょうか。しかし一方で、「小学生らしい発想がありそうだな」とも考えたのではないのでしょうか。

お気づきだと思いますが、この「20答法」には「正解」はありません。皆さんの回答も小学生の回答も、その内容は人それぞれで、個人の特徴が現れます。自分自身のことですから他者と違って当然といえます。

しかし、子どもたち(小学校1年生～6年生)の回答を分析してみると、それぞれの個性があふれる一方で、学年(あるいは年齢)の特徴が現れてきます。その一部を紹介します。

まず、子どもたちの回答の中に「私は人間です」、「私は人です」、「私は子どもです」というものがありました。この回答が学年ごとにどのくらいの割合で出現するかを分析したところ、1年生は3.6%、2年生は13.3%、3年生は0%、4年生は46.2%、5年生は2.7%、6年生は14.7%という結果が示されました。注目したいのは4年生で、他の学年に比べ顕著に出現割合が高く、約半数の子どもたちが自身のことを「人間」、「人」、「子ども」と説明しています(富井他(2019)「学童期における自己の構成の発達—20答法を用いた分析—」対人援助学会第11回大会)。





クローズアップ⁺



「奈良教育大学鉄オタ倶楽部」
発達障害のある子どもを対象とした余暇支援及び社会性発達支援の
プログラム。写真は満足先での一コマ。

次に、回答の中で特に多かったのが「私は〇〇が好きです」というものです。〇〇の中にはカレー、算数、ドッジボールなどなど、それぞれの好きなものが挙げられていました。ですが、こうした十人十色の回答においても学年の特徴が現れてきます。その一つが「流行」です。この「流行」は様々な回答を一つのカテゴリーとしてくくったもので、具体的には〇〇のなかに芸能人、音楽(曲名など)、ゲーム、アニメ、キャラクター等が挙げられていました。そして、「流行」について述べるというのは低学年にはあまり見られず、3、4年生から徐々に回答が増加するようになります(竹内他(2021)「20 答法の回答からみた小学生の発達の特徴—「好き」および「嫌い」の記述に着目した分析—日本発達心理学会第32回大会」)。

こうした事実から子どもは3、4年生頃になると自分とは何かを考えたり、これを説明したりするとき、個人的な文脈だけでなく、客観的な視点から自分のことを捉えるようになるといえます。例えば「子ども」というのは、人全体において自分は「子ども」であると客観視した結果でてくる回答です。4年生という時期は、こうしたことを「わざわざ」言いたくなる時期なのでしょう。また「流行」については、自分の身の回りの世界だけでなく、社会全体や社会の動きに目を向け始めていることの現れと考えることができそうです。

こうした過程を経て、子どもたちは自らが社会の一員であるということを意識していくようになるのではないのでしょうか。

「こころ」を探る

この3、4年生という時期は、9、10歳頃の発達の節目として発達や教育の領域で注目されています。発達の節目というのは、外界の捉え方や外界への関わり方が質的に大きく変化する時期のことをいいます。先の例で言えば、9、10歳の節目を越えた子どもたちは、客観的に自己を理解するようになったり、具体的なことだけでなく抽象的なことについても



「で・あいのある世界展」
「障害のある・ないの垣根を取り払って、アートの世界を通じて人と人との交流を広げていきたい!」という願いのもと企画されたアート展です。



論理的に考えることができるようになったりすると考えられています。

このように、発達の節目にはどのような特徴が現れるのか、またそれをどのような方法によって捉えることができるのか。子どもたちの「こころ」を探るというのが私の研究のテーマです。主に幼児期から学童期を対象としています。特に学童期の子どもたちの発達の特徴についてはまだわかっていないことがたくさんあります。学童期の子どもたちの「こころ」の動きが明らかになれば、例えば子どもたちの「こころ」

をよりワクワクさせるような授業を作ることができるようになると思います。

また「こころ」を探るということは、障害や発達に課題のある子どもたちの支援、教育の分野でも重要視されています。特に9、10歳の節目については、この節目を越えるのに時間を要する子どもたちがいることが注目されています。障害のある子どもたちに必要な支援や教育とは何かを考えると、子どもたちの「こころ」の動きを探るということを起点に考えることが重要ではないでしょうか。

プロフィール



特別支援教育研究センター

とみ い な な み
富井 奈菜実 専任講師

立命館大学大学院応用人間科学研究科応用人間科学専攻修士課程修了。修士(人間科学)。
2017年に本学着任。

ゼミ生からの研究室紹介

この研究室では、発達障害のある子どもたちについて専門的に研究をすることができます。

ゼミでは、卒業論文の研究テーマに合わせて、子どもたちの様子や内面の思いについてたくさん話し合います。富井先生が発達段階の観点からの姿を教えてくださいるので、子どもたちの実態をより深く考えることができます。

今年度は新型コロナウイルスによりZoomでゼミを行うことがほとんどでしたが、対面の時と変わらずに話し合いができたのでしっかり研究を進めることができました。

私たちは、この研究室で発達障害のある子どもたちの様々なエピソードを聞き、「この活動のこんなところが成長につながったのかもしれない」など、子どもたちへの働きかけについて学びを深めることができたと感じています。

こは、自分の興味のあることに集中して取り組めて、自分の思考の引き出しを広げることのできる研究室です。



研究室紹介学生(右が津森さん、中央が奥田さん)

教育学部 学校教育教員養成課程

教育発達専攻

特別支援教育専修 4回生

私立智辯学園奈良カレッジ高等学校出身

つ も り き よ
津森 貴予さん

教育学部 学校教育教員養成課程

教育発達専攻

特別支援教育専修 4回生

京都市立紫野高等学校出身

お く た
奥田 ひとみさん

